



日本糖尿病・妊娠学会

一般社団法人

日本糖尿病・妊娠学会 ニュースレター

The Japanese Society of Diabetes and Pregnancy News Letter

2018年5月発行 Vol.20 No.1

第38号

第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会のご案内

テーマ：糖尿病と妊娠—この重要な概念を如何に次世代に伝えるか

日時：平成30年11月23日(金)・24日(土) 会場：パシフィコ横浜 アネックスホール



第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会長

守屋 達美

北里大学健康管理センター
センター長

第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を、2018年11月23日(金)、24日(土)の2日間にわたり、横浜「みなとみらい」のパシフィコ横浜アネックスにて開催いたします。開催まで6カ月余りとなり、現在プログラムの構成等を含め、鋭意準備を進めております。

この数年間の「糖尿病と妊娠」の分野では、子宮内胎児環境の重要性とともに、妊娠前女性の教育から妊娠中そして分娩後の管理、さらには将来の児の予後だけではなく児の教育まで、長期間にわたる連続性をもったケアに重点が置かれています。すなわち、医療者側としては、「常に継続してみていく姿勢」をもち続けることが必要と考えます。昨今の当学会の年次学術集会は上記のことを根幹にして運営されてきています。

上記の「常に継続してみていく姿勢」は、分娩後に一見正常耐糖能になったGDMの経過観察をきちんと行わなくてはならないことにもつながります。本年次集会では、昨年を引き続き、GDMのフォローアップ体勢の有機的な構築に関して、シンポジウムを企画しています。各施設の試み等を踏まえて、皆さんとともにディスカッションしたいと考えています。

一方では、糖尿病性慢性合併症を有する妊婦も依然として診療の場に現れてきます。合併症、とくに糖尿病性腎症(腎症)を有する妊婦のケアも重要な問題であり、

この点も参加者の方々と討議したいと考えています。腎症合併妊娠に関するシンポジウムは、2006年の当学会年次学術集会から行われていませんので、腎合併症と耐糖能異常合併妊娠に関するシンポジウムを行う予定です。

そして、海外からの講演は、腎症と妊娠のエキスパートであるElizabeth Mathiesen先生に「Diabetic nephropathy – the impact of antihypertensive treatment on pregnancy outcome. (仮題)」でお話しいただく予定です。

本学会の全体のテーマは、「糖尿病と妊娠—この重要な概念を如何に次世代に伝えるか」です。この分野の次世代への継承・啓発・教育は非常に重要と考えていますが、この点を皆さまと共有できれば大変ありがたく思います。

糖尿病・妊娠学会の年次学術集会は、関東においては東京での開催が多く、実は横浜での開催は初めてです。学会場のパシフィコ横浜は、「みなとみらい」の海沿いに位置し、横浜ベイブリッジや横浜港などの絶好の風景を楽しむことができます。11月23日(金)は祭日ではありますが、むしろそのために参加しやすいのではないかと拙考しています。3連休の方もいらっしゃると思いますので、みなとみらいから少し足を伸ばして、元町・中華街などをお楽しみいただいても良いと思います(ただし学会プログラム期間中は、学会に参加をお願いしますね)。なお、一般演題の募集開始はもう少ししたら始まります。締め切りは7月末(予定)を考えています。ぜひ、たくさんの応募をどうぞよろしくお願いいたします。

「次世代への継承」という観点からも、本学会の会員の皆さまはもちろんのこと、他のさまざまな分野の方々もお誘いいただき、多数の皆さまのご参加をお待ちしています。



● 発行人 理事長 平松祐司

● 発行 一般社団法人 日本糖尿病・妊娠学会 www.dm-net.co.jp/jsdp/ 〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル(株)創新社内
TEL.03(5521)2881 FAX.03(5521)2883

編集制作：(有)知人社 ロゴマークデザイン：杉山光章

IADPSG2020 開催にあたって



一般社団法人 日本糖尿病・
妊娠学会 理事長

平松 祐司

岡山大学名誉教授
岡山市立市民病院顧問

IADPSG 2020 学会を 2020 年 11 月 13 日（金）～ 15 日（日）の 3 日間にわたり、京都駅前のメルパルク京都で開催させていただきます。このうち、11 月 14、15 日は第 36 回日本糖尿病・妊娠学会（杉山 隆会長：愛媛大学）と共同開催になります。

IADPSG 2020 誘致にあたっては、大森安恵名誉理事長に大変ご尽力いただいております。先生が長年にわたり国際的にこの領域で活躍され、貢献されてきたことが評価されて実現したものと思っています。

昨年 12 月 1 日に、第 1 回組織委員会を開催し、学術プログラム委員会（安日一郎委員長）、登録推進委員会（守屋達美委員長）、広報委員会（杉山 隆委員長）、募金委員会（内湯安子委員長）、接遇委員会（佐川典正委員長）から、骨子案が報告されました。この案をもとに、充実した、また日本ならではの「おもてなし」も入れ、参加したみなさんに楽しんでいただける学会にすべく準備をすすめていきます。

2010 年に IADPSG から世界統一の妊娠糖尿病（GDM）の診断基準が発表され、それを採択後、わが国でも GDM の頻度は約 4 倍に増加しました。またこれと並行して Developmental Origins of Health and Disease（DOHaD）の概念が定着し、妊娠中および新生児・小児期の栄養・管理の重要性が今まで以上に認識されるようになり、本学会のテーマである糖代謝異常妊婦およびその児の管理の重要性が認識されるようになりました。こ

のような時期に、日本で IADPSG2020 を開催できるのは非常に意義深いことと思っています。

本学会では、妊婦の糖代謝異常研究・臨床に携わる、世界的な研究者が一堂に会し最新の知見を発表されるので大変勉強になり、多くのメッセージを本学会から世界に向けて発信できるものと期待しています。会員の皆さんも、今から自施設での研究成果をまとめ、本学会で発表してほしいと思います。

IADPSG2020 に関する情報は、本学会のホームページ上に、IADPSG2020 のサイトを作成し、掲載していきますをご覧ください。



国内関連学会開催日程

第 54 回日本周産期・新生児医学会学術集会

テーマ：母と子のネットワーク

2018 年 7 月 8 日（日）～ 10 日（火）

会 長：中井 章人
（日本医科大学教授、日本医科大学多摩永山病院副院長）

会 場：東京国際フォーラム

公式ホームページ：<http://jspn54.umin.jp/>

第 52 回日本小児内分泌学会学術集会

テーマ：基礎と臨床の融合 - 研究有っての臨床臨床有っての研究 -

2018 年 10 月 4 日（木）～ 6 日（土）

会 長：浦上 達彦（日本大学診療教授）

会 場：ホテルイースト 21 東京

公式ホームページ：<http://jspe52.umin.jp/>

第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会の御礼



第33回日本糖尿病・
妊娠学会年次学術集会会長

鮫島 浩

宮崎大学医学部附属病院院長
宮崎大学医学部発達泌尿生殖医学
講座産婦人科学分野 主任教授

2017年12月の2日、3日の2日間、第33回の学術集会を宮崎市のシーガイアコンベンションセンターで開催したところ、377名の出席を得ることができた。この書面を借りて、関連各位に、心から厚く御礼申し上げたい。

メインテーマは、基本に戻り「母児の健康と糖代謝異常」とし、この流れに沿って、シンポジウム2題、海外招聘講演、教育講演2題、助産師集中講座ひとつを実施した。また一般演題も62題の応募を得た。今回、日々の臨床のなかから疑問点をシーズとしてまとめあげたり、基礎的実験データをまとめた皆さまに、改めて感謝申し上げたい。

2日間の本学術集会を終えて、学会のあり方を考える機会に恵まれたので、私見を述べて第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会のまとめとしたい。

継続性に関して

今回の学術集会でも、ここ数回の慣習を踏襲し、継続性を重視した取り組みを行った。

まず、シンポジウム2では昨年のミニシンポジウムの結果を受け、多胎妊娠と糖代謝異常に関して5人の演者に討論していただいた。栄養管理、GDMの発症頻度、再発頻度など、まだまだ解決すべき問題が残されている領域であることが再認識された。同様に、シンポジウム1ではGDMは本当にT2DMになりやすいのか、という問いかけを行った。6人の演者に討論していただいた

が、今回の内容をもとにさらに研究を深めて、来年の第34回の本学術集会で結論を導き出していただく予定である。また、助産師集中講座も、「基本」を3回連続して実施し、今回で「基本」の「ん」を終えることができた。

学術集会ごとに、あるテーマに取り組んだ学会も個性が出て楽しいものであるが、このような継続的な取り組みも学会が進める方向性として重要であろうと思われる。これが本学術集会のひとつの伝統になれば、と期待する。

基礎的研究と臨床研究に関して

海外招聘講演では、米国からSylvie Hauguel-de Mouzon先生を招いて、“The intrauterine exposome of obesity”（肥満の子宮内環境因子）、と題して講演をいただいた。Lipid-inflammation connection、metabolic inflammationなど、基礎的な概念を研究データをもとに詳細に説明していただいた。基礎研究の楽しさと美しさを再認識できた素晴らしい講演であった。本学会でも、基礎的研究をさらに推進する必要性を感じた。

また、ランチョンセミナーのひとつではビッグデータの解析手法を解説していただいた。医療統計、電子データ集積、EDCなどを適切に用いるべき時代がすでにそこまで来ている、その対策に関する話題であった。今後、臨床データを収集し、適切に管理し、解析することがますます求められていく。本学会でも、DREAMBee Projectをはじめとしてデータを集積する試みが散見される。これからも学会が主導し継続的に「糖尿病と妊娠」に関する日本発のビッグデータ解析結果を出していく、そのことが喫緊の課題であろうと感じた。

最後に、改めて第33回学術集会への皆さまからの多大なる援助に御礼を申し上げ、学術集会の総括といたします。

海外関連学会開催日程

ADA-第78回米国糖尿病学会

2018年6月22日(金)～26日(火)

会 場:アメリカ オーランド
Orange County Convention Center

公式ホームページ: <https://professional.diabetes.org/meeting/scientific-sessions/78th-scientific-sessions>

第54回欧州糖尿病学会

2018年10月1日(月)～5日(金)

会 場:ドイツ ベルリン
Messe Berlin Exhibition Halls

公式ホームページ: <https://www.easd.org/annual-meeting/easd-2018.html-0>

トピックス



杉山 隆

愛媛大学大学院医学系研究科
産科婦人科学講座

偉大な観察研究“HAPO”のフォローアップスタディ

妊娠糖尿病の診断基準は、皆さまご存知のとおり、HAPO (hyperglycemia and adverse pregnancy outcome) スタディの結果を基に設定されている。妊娠 24 週から 32 週までの 75g 経口ブドウ糖負荷試験の血糖値と妊娠アウトカムの関連を検討した観察研究である。本研究の結果、妊娠後半期の母体血糖は、児の過剰発育や児の高インスリン血症、皮下脂肪量や帝王切開率の増加と関連することが明らかとなった。

HAPO スタディの偉大な点は、上記妊娠アウトカムまでの検討のみならず、母児のフォローアップ観察研究が継続していることである。すでに HAPO スタディの結果が報告され 10 年が経過するが、この間、児の 2 歳児、5 歳児の時点での児体格と母体血糖は関連しないことが報告されていた。ところが、2017 年 6 月開催の米国糖尿病学会、2017 年 9 月開催の欧州糖尿病学会妊娠分科会 (DPSG)、さらに 2018 年

2 月開催の米国母体胎児医学会において、ついに母体の血糖と平均 10 歳児の脂肪量、新生児期脂肪量と 10 歳児の脂肪量が関連すること、既往妊娠糖尿病女性に 10 年後の耐糖能低下や脂質代謝異常と関連することが相次いで報告された。本研究では研究対象者の遺伝子も保存されており、今後ゲノム解析もなされるであろう。

2017 年 11 月にオランダのロッテルダムで開催された第 10 回国際 DOHaD 学会に参加した。子宮内環境と児の将来の健康に関する疫学研究は精力的になされているが、今や EWAS (epigenome-wide association study) の時代に突入した印象をもった。今後はいろいろな切り口で子宮内環境と次世代の生活習慣病に関するエピジェノムの解析が進むであろう。何らかの新たなバイオマーカーが見つければ、リスク因子やバイオマーカーを組み合わせ、妊娠合併症予防や児の将来の健康のための妊娠中からの早期介入法を介した先制医療の発展への道が開かれるであろう。

DIP 2019 (第 10 回糖尿病、高血圧、メタボリック症候群と妊娠に関する国際シンポジウム)

DIP2019 は、2019 年 5 月 29 日から 6 月 1 日までイタリアのフィレンツェで開催される。第 7 回の本学会もフィレンツェで開催されたが、街そのものが屋根なき博物館とも表される世界遺産であり、会場と宿泊場所の移動も楽しく、学問、食を含めた五感を満喫できることを保証する次第である。



内山 温

東京女子医科大学
母子総合医療センター
新生児医学科

第61回 日本糖尿病学会年次学術集会

直前のご案内になりますが、5 月 24 日 (木) ~ 26 (土) に東京国際フォーラム他で開催されるこの学術集会 (<http://www2.convention.co.jp/61jds/>) のなかで、「妊娠と糖尿病 - 胎生発育を巡る課題」というテーマでのシンポジウムが開催されます。日時および会場は、5 月 25 日 (金) 14:20 ~ 17:20、第 21 会場：東京コンベンションホール 5 階大ホールの予定です。妊娠と糖尿病について、母児の最新の知見を学べる機会になると期待しています。

糖尿病母体より出生した早産児の予後

1995 ~ 2007 年の間に、イスラエルの施設で在胎 24 ~ 33 週で出生した糖尿病母体より出生した児は糖尿病合併のない母体より出生した児と比較して、呼吸窮迫症候群やその他の合併症の頻度に有意差はないと報告されました (Bental Y, et al. Pediatrics. 2011;128:e848-55)。しかしながら、近年の NICHD Neonatal Research Network のデータベースを用いた在胎 22 ~ 28 週で糖尿病母体より出生した超早産児についての報告では、妊娠前からインスリン治療が必要であった糖尿病母体より出生した児は、糖尿病合併のない母体より出生した児より有意に壊死性腸炎 (調整相対リスク比:1.55,[95%信頼区間;1.17-2.05]) と遅発性敗血症 (調整相対リスク比:1.26,[95%信頼区間;1.07-1.48]) の頻度が高いとされています (Boghossian NS et al. Pediatrics. 2016 ;137: e20153424)。早産児の治療成績は国によって差がありますが、糖尿病母体より出生した超早産児では、これらの合併症を併発する可能性が高いことを念頭において診療にあたる必要があるかもしれません。



川崎 英二

新古賀病院糖尿病センター

糖代謝異常合併妊婦に対する FGM の安全性と正確性

妊娠糖尿病や糖尿病合併妊娠など糖代謝異常を合併した妊婦の血糖管理における血糖モニタリングは大変重要であり、古くから血糖自己測定（SMBG）が繁用されてきました。しかし、近年の血糖測定技術の開発により、血糖モニタリング法も様変わりしています。2010 年には持続血糖モニタリングの先駆けである CGMS-Gold が保険適用になり糖代謝異常合併妊婦の血糖管理にも用いられるようになりましたが、CSII の使用経験や導入体制などが施設基準となっているため普及は限定的でした。そんななか、2016 年にフラッシュグルコースモニタリング（flash glucose monitoring : FGM）の先駆けとして FreeStyle リブレの販売が始まり、2017 年 9 月には SMBG の補完的な位置づけで保険適用になり一般診療においても使用



頻度が増えてきています。

しかし、妊婦は FreeStyle リブレの使用対象外となっています。そこで今回は、最近報告された糖代謝異常合併妊婦における FGM の安全性と正確性に関する論文を紹介します（Scott EM, et al. Diabetes Technol Ther. 20(3):180-188, 2018）。平均妊娠週数 26.6 週の 74 名（1 型糖尿病 24 名、2 型糖尿病 11 名、GDM 39 名）に FreeStyle リブレを 2 週間装着し、SMBG のデータと FGM による皮下間質液中のグルコース濃度を比較検討したところ、平均絶対的相対的差異（MARD）は 11.8%、血糖値 100mg/dL 未満における平均絶対差異（MAD）は 9.6mg/dL で、測定値の 88.1% がコンセンサスエラグリッドのゾーン A、99.8% がゾーン A およびゾーン B に入りました。1 型糖尿病妊婦、インスリン治療妊婦では他のグループに比べゾーン A の比率がやや低くなりますが、A+B ゾーンにはいずれも 99.5% 以上が含まれ正確性が高いことが示されました。

また、安全性においても測定器に関連する有害事象は認められませんでした。これらの結果は、FGM が妊婦においても安全かつ正確に利用可能であることを示唆しています。

サブグループ	コンセンサスゾーン	
	A	A+B
全症例	88.1%	99.8%
GDM	89.4%	100%
1 型糖尿病	85.4%	99.6%
2 型糖尿病	89.8%	99.7%
インスリン治療妊婦	86.6%	99.7%
非インスリン治療妊婦	90.6%	100%